



素材研究 (海外)

ザリピエ



1930年代の陶器作家の自宅は村で唯一の博物館に ©ポーランド政府観光局



ポーランド人も知らない「田舎の魅力」 可愛らしい花柄模様のペイントが人気に



世界遺産の古都・クラクフの中心地である歴史地区



ヴィスワ川河岸に佇むクラクフのヴァヴェル城



クラクフの南東約10キロ。世界遺産・ヴィエリチカ岩塩坑の地下教会



民族舞踊はポーランドを象徴する伝統文化

白い壁面のカラフルな花柄は「おとぎの国」そのもの ©石川みゆき

ワルシャワと並ぶ人気観光地・クラクフの東へ約100キロ。鉄道の駅はなく、最寄りの大きな町へのバスも1〜2時間に1本という厳しいアクセス環境で、ポーランド人でさえも知らない人が少なくないというザリピエは近年、JATAによる「ヨーロッパの美しい30選」に入るなど、日本人をはじめとする外国人旅行者の間で人気が高まっています。

1930年代に陶器作家が広めたペイント

ザリピエの家庭には昔、煙突がなかったことからストーブや台所の煙で壁や天井が煤だらけだったと伝えられています。19世紀の末に煙突が造られるようになり、女性たちが汚れた壁にペイントを始め、「ザリピエ模様」と言われるカラフルな花柄を民家の外壁にあしらいました。

ポーランド政府観光局の石川みゆき局長補佐によると、1930年代に陶器作家として有名だったフェリツィア・ツリウォという女性が、家の壁面にカラフルな花模様を描き、華やかな光景を生み出したようです。

ザリピエの道路沿いに点在する家々の壁だけでなく、教会や消防署などにも「ザリピエ模様」が描かれ、村全体がおとぎの国のような雰囲気を感じています。

1948年からはペイントコンテストも

毎年開催されており、「最初は村の住民同士で楽しむイベントだったものの、その盛り上がりによって外部からも注目を集めるようになった」（石川局長補佐）といっています。

クラクフ、ワルシャワだけでなく ポーランドツアーの魅力

ザリピエの民家は外からしか見学できませんが、フェリツィア・ツリウォが暮らしていた家は村で唯一の博物館となっており、往時の民家の内部を見ることが出来ます。昨年6月からリノベーション工事に突っ入り、2018年末までは閉館の予定ですが、「道路から民家の壁を見るだけでなく、教会やペイントアーティストの家などには入れるので、ザリピエ模様の魅力は十分に楽しめる」（石川局長補佐）状況となっています。

ザリピエには、「ザリピエ模様」の展示や情報発信、ワークショップなどを行う文化センターもあり、雑貨などの土産品を購入することも可能です。

石川局長補佐は、「ポーランドの魅力はワルシャワやクラクフなどの代表的な観光地だけにとどまらず、田舎にちよと足を延ばせば、昔ながらの伝統を守る小さな村が点在し、思いがけない景色に出会えることが少なくありません」と強調。「その代表的な存在とも言えるザリピエは、FITベースで訪れるのは難しいだけに、旅行会社ならではの商品としてマーケットに提案していただきたい」とその魅力をアピールしています。